

第210回 番組審議会

1. 日 時 平成24年3月13日(火) 12:00～
2. 場 所 メトロポリタン盛岡NEW WING 3F「星雲 東の間」
3. 委 員 委員総数 12名
出席委員数 9名(欠席委員数 3名)

○ 出席委員(敬称略)

中村 慶久(委員長)

三浦 宏(副委員長)

—以下50音順—

久慈 浩介

斎藤 雅博

東海林 千秋

菅原 正二

藤原 保雄

村上 幸子

吉田 浩次

○ 会社側出席者(7名)

佐藤 滋樹(代表取締役社長)

小原 忍(専務取締役)

藤澤 利憲(常務取締役)

前田 秀男(取締役編成技術局長)

藤原 銀司(取締役営業局長)

工藤 哲人(東京支社 営業チーム)

紅屋 幸樹(めんこいエンタープライズ 制作部 副部長)

○ 事務局 一戸 俊行

4. 議 題

呼び起こせ！三陸魂 ～復興を担う漁業・地元スーパー・商店の挑戦～

平成 24 年 3 月 3 日 (土) 14:00～14:30

5. 議 事 概 要

今回は 3 月 3 日に放送した「呼び起こせ！三陸魂 ～復興を担う漁業・地元スーパー・商店の挑戦～」を審議しました。議事の概要は以下のとおりです。

●岩手めんこいテレビ 工藤プロデューサーの説明

- ・大船渡に本部があるスーパーマーケットチェーン「株式会社マイヤ」の^{まいや}米谷春夫社長の講演を聞いたことがきっかけで、自身も被災し、商売が危機的状況に追い込まれる中、被災者の生活を守ろうと奔走したその姿に、三陸に生きる人々の力強い魂を感じ、それを伝えようと番組を企画した。
- ・番組では、被災から立ち上がろうとする三陸の経営者の姿を中心に、漁業再生支援の一例として「日本財団」の取り組みも併せて紹介した。
- ・自分はいったい被災地のために何が出来るかと、自問自答した 1 年だった。
- ・被災地から遠い視聴者、国民あるいは世界の人たちに、いかに三陸に目を向けてもらえるような仕事ができるかというのが、めんこいテレビを含む私たちメディアの役割ではないかと思う。

●めんこいエンタープライズ 紅屋ディレクターの説明

- ・この番組は、プロデューサーの工藤の“熱い思い”から始まった。震災直後から記者、ディレクターとして、被災地取材し続けた私と工藤の、復興を応援し続けるという思いで取り組んだ。

- ・「漁業再生への道」、「マイヤの挑戦」、「木村商店の復活」という3つの柱で、インタビューを中心に構成した。前向きな経営者の言葉で、少しでも前に進む気持ちを持ってほしいと思った。
- ・めんこいテレビ開局20周年記念番組のロケで、震災前日に陸前高田市の広田湾や高田松原を撮影した。その映像を震災後初めて使用した。高田の美しさを心に蘇らせてほしいと思った。
- ・ナレーションは状況や補足説明に留める、制作側の感情移入は極力避けた。
- ・今後も、復興に向けた三陸の魂を奮い立たせて、明るい未来への礎となるような番組を作り続けていきたい。

●出席委員からの意見・感想

- ・「世界に冠たる復興をやろう」「やめることよりやることの方が先だ」「震災前以上の仕事をしたい」など、経営者の力強いメッセージが伝わってきた。
- ・インタビュー中心の構成が良かった。この1年間戦ってきた人たちの言葉として迫力があつた。
- ・米谷社長のスーパーでは、震災前から津波を想定した訓練をしていたということだが、「訓練中に白い歯をみせる社員がいたらやり直し」という言葉が印象的だった。
- ・震災前日に撮影した、高田松原の映像が美しかった。
- ・説明のスーパーが、分かりやすかった。
- ・番組の前半のテンポが緩かったが、後半は盛り上がっていた。

- ・被災地の実態を知らない人がこの番組を見た際に、復興が進んでいると勘違いされないように、まだまだ踏み出せていない人たちも紹介して欲しかった。
- ・30分の番組で内容が盛りだくさんだったので、シリーズ化するなどして、テーマを絞って掘り下げて欲しい。
- ・被災県の放送局として、このような番組を、継続して作ってほしい。

6. 審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置

特になし

7. 審議機関の答申意見概要を公表した場合におけるその公表内容、方法及び年月日

- * 平成24年3月14日（水） 産経新聞 東北版
- * 平成24年3月24日（土）午前4時42分から4時45分まで「めんこいテレビ番組審りポート」内で放送
- * 据え置き書類を作成し、本社受付に置き一般の人々が自由に閲覧できるようにした

8. その他の参考事項

特になし